ブラヴォー“新日鉄コンサート”

故　**裕川雅雄**（LF）

ロストロポーヴィッチ（中央・チェロ）のリハーサルに立会う筆者（左）

みんなで語ろう民放史

題字　中川順

本文は関東民放クラブ会報45号（平成10年8月）に紹介されたものを再編集して掲載したものです。ご執筆の裕川雅雄氏は平成13年3月、85歳で故人になられました。

（編集委員会）

ニッポン放送制作、毎日曜日夜の30分番組『新日鉄コンサート』は、昭和30年10月に、富士製鐵株式会社提供『フジセイテツ・コンサート』として始まり、昭和45年、製鉄の大合併により新日本製鐵株式会社提供になったものだが、番組が始まってから今年（平成10年8月）で43年目を数える。

この番組の最大の特徴は、すべてが内外の名演奏家たちによる生演奏の新しい収録に限られ、レコードやCDを使用しないことにある。公開録音も、東京に限らず全国各地で行い、AM基幹10局にネットしている。

さて、番組の内容については、下手をすると自画自賛になるので、むしろ失敗例や逆に誉められたことなどの中からいくつか取り上げて見たい。

それでは先ず誉められた中から一つ。昭和50年1月3日の『朝日ジャーナル』に「民放クラシックの長寿番組」という記事が載っているが、〝坂〟という署名入りのこの記事は、私にとってはかけがえのない宝物のような感じの励ましの記事と思うので、ここに一部を引用させてほしい。

《民放クラシックの長寿番組》

『新日鉄コンサート』が一千回記念のシリーズを組んでいる。一口に一千回というが、ニッポン放送が開局して20年、この番組は正味19年2ヶ月もの期間を経ているわけで、民放の特にAM局のクラシック番組としては、異例の息の長さといえる。

もっともTBSラジオの『百万人の音楽』も長寿番組だが、この方はレコードが中心になっていて、あくまでナマの演奏で一貫してきた番組としては、民放では唯一の例である。

こうしたクラシック番組は、もともと聴取率は低くそれを維持することは至難なのだ。が、『新日鉄コンサート』の場合は、スタート以来、スポンサーが硬

名古屋での公開録音

派であったことと、この番組に生涯をかけた裕川雅雄というプロデューサーのいたことが、この記録を達成するのに貢献したと見ていいだろう。（中略）当事者の苦心もかなりあるようで、特に富士製鐵が八幡製鐵と合併して新日本製鐵に移行する際には、大きな危機があったと伝えられている。それを乗り越えての一千回記念だけに、その意義と価値もまた評価されるべきであろう。

ギレリス収録の失敗

次は勇み足による失敗。昭和32年の夏の終わりごろ、毎日新聞が同年10月、ソ連の若手ピアニスト、エミール・ギレリスを招聘して公演を行うというビッグニュースが入った。私は早速毎日新聞を訪ねて小野事業局長に会った。「ギレリスは10月8日に来日し、10日午後5時半から神田共立講堂で演奏会を行い、ついで12日、午後6時半から同所で、ロイブナー指揮のNHK交響楽団と共演して《協奏曲の夕べ》を開くが、10日の独奏会は、まだ何処からも収録申込みの話は来ていない」とのこと。「それでは是非ニッポン放送の『フジセイテツ・コンサート』で収録させてほしい」とお願いをし快諾を得たので諸般の準備を進め始めた。

エミール・ギレリス、オデッサ生まれ41歳。オデッサ音楽院卒業。1936年、ウィーンの国際ピアノ・コンクールで第二位、38年、ブリュッセルの〝イザイ国際コンクール〟で第一位になり、その年からモスクワ国立音楽院の教授になった。その後ヨーロッパ各国を演奏旅行。54年のパリ独奏会で世界第一級の折紙をつけられ、翌55年秋には、戦後初の米ソ音楽交流にソ連がアメリカへ送ったピアニストである。当時、ソ連が如何に彼を誇りとし、高く評価していたかが分かる。ギレリスはアメリカの音楽ファンを熱狂させ、日本にはそれまであまり聞こえてこなかった彼の名が急にクローズアップされてきていたのである。

私は彼の来日初の独奏を『フジセイテツ・コンサート』で全国の音楽愛好家に紹介できる喜びをかみしめていた。

しかし、当時のソ連は鉄のカーテンの彼方にあり、情報不足と相俟って果たしてギレリスが来日するだろうかとの不安がつのり、最後には乗客名簿まで確認して自分を安心させた。こうした諸条件が大体出そろったところで編成局長に報告した。「そうか、よかったな。遺漏のないよう進めるように」と言われるに違いないと思っていた私に、予想もしない答えが返ってきた。

「君、それはまずいよ。うちの会社の成り立ちからいってもそんな案が通る訳がないではないか」、まさに青天の霹靂であった。当時、日ソ間には勿論国交もなく正式な文化交流もなかった時代で、何事もアメリカの鼻息をうかがってからという時代でもあった。

こういう時代だからと自分自身をも納得させ、早速毎日新聞に小野局長を訪ね、収録を断念せざるを得なくなったことを陳謝した。毎日新聞には大変ご迷惑をおかけしてしまった事を恥じ入るばかりであった。

上司に無断でヤーセック公録

しかし当時は私も若かったし、この裁定にはどうしても納得しかねるものがあった。戦争が終わり敵味方もない、文化交流こそ重要な時代ではないだろうかとの思いをこめ、共産圏のチェコからヴァイオリニスト、ラディスラフ・ヤーセックが来日した折には、公開録音に出演してもらい、放送を断行した。この公開録音に際してはいつものようにほぼ一ヶ月前から番組の終わりで予告、はがきによる来場希望者を募って、公録を実施したが、編成局長には事前事後とも報告は一切しなかった。もし事前に報告をしていれば、立場上「ノー」といわれたに違いないと思うと、これはこれでよかったかな、と自問自答した次第であった。

収録したかずかずの名演奏家たち

外来演奏家といえば、昭和31年、カルル・ミュンヒンガー指揮のシュトゥットガルト室内オーケスト

ラ公演を日比谷公会堂で収録、3月10日と17日に放送しているが、この時のリハーサルに立ち会って愕然としたのが記憶に新しい。それは〝コントラバスにも音程があるのだ〟という発見であった。そしてミュヒンガーの精緻な指揮によるすばらしいアンサンブルの魅力が、後に〝トーキョー・コンサートマスターズ〟という弦五部からなるアンサンブルを私に作らせるきっかけとなったのである。

この年の2月、〝NFC交響楽団〟が初登場するが、N→ニッポン放送、F→フジセイテツ、C→コンサートの3つを組み合わせたこのオーケストラは、在京各オーケストラの主要メンバーをピックアップしてこの番組のために編成するもので、前述のトーキョー・コンサートマスターズと共に呼び物の双璧として数々の名曲を披露してくれたものである。

前記のトーキョー・コンサートマスターズは、昭和34年7月25日番組に初出演。当時まだNHK交響楽団の研究員だった岩城宏之が指揮者となり、文字通り在京の主要オーケストラの弦楽器セクションのコンサート・マスタークラスで編成したもので、モーツァルトとバルトークの作品を演奏したが、そのブリリアントな表現は「果たしてこれが日本の演奏家によるものか」と識者の耳をすら疑わせたものであった。

厳本真里弦楽四重奏団のリハーサル　厳本真里さん（左）

厳本真理さんを偲んで

この番組の主軸の一つに〝厳本真理弦楽四重奏団〟を挙げたい。

厳本さんと私の出合いは昭和12年にさかのぼる。この年のNHK・毎日新聞共催による音楽コンクールの優勝者が厳本さんであった。当時私は明治大学交響楽団でヴァイオリンを弾いていたが、日比谷公会堂で厳本真理（当時はメリー・エステルであった）の演奏するブルッフの『ヴァイオリン協奏曲』を聴いて感激。翌年秋のわれわれの定期演奏会にこの美少女をゲストとして招き、この曲を演奏してもらったことからであった。

当時、厳本真理さんのお宅は巣鴨の駅に近いトゲ抜き地蔵の近くの閑静な住宅街にあり、出演依頼のため訪れた時には、外務省にお勤めのお父さまとアメリカ生まれのお母さま、それに恩師であるヴァイオリニスト・小野アンナ先生（後年私も先生に師事することになった）それに真理さんがいらして、出されたコーヒーを音を立てずに飲むのにえらく苦労したことを覚えている。

その厳本さんは、日本を代表する女流ヴァイオリニストとして演奏活動を展開しており、放送はもっぱらNHKに限られていたのを、昭和31年頃からこの番組の専属のような形で迎え入れたのだが、昭和33年頃から室内楽活動に重点を移し、遂には〝厳本真理弦楽四重奏団〟として定期演奏会を持つ（昭和41年）に至った。わが国に室内楽を定着させた功績は真に大きいといえよう。

三善晃作曲「チェロ協奏曲」の打合せ

芸術祭大賞も二度受賞

この番組でもシリーズ物としてベートーベンのピアノ三重奏曲並びに弦楽四重奏曲の連続演奏に全力を注ぎ、昭和39年2月、第12回民放祭金賞受賞。昭和40年秋の芸術祭ではバルトークの全6曲の弦楽四重奏曲で奨励賞を受賞。昭和42年には、11月25日に初演放送した三善晃作曲『弦楽四重奏曲第2番』にも芸術祭奨励賞が贈られた。

芸術祭受賞歴で特筆すべきことがこの後にも二度あった。間宮芳生作曲の『合唱のためのコンポジション第7番マンモスのお墓』がひばり児童合唱団により初演・放送され、昭和47年度の芸術大賞

〝励ます会〟でご挨拶

（文部大臣賞）を受賞。昭和49年度芸術祭では、三善晃作曲の『チェロ協奏曲』を、堤剛のチェロ、若杉弘指揮の読売日本交響楽団で初演・放送、同じく芸術祭大賞を受賞している。

さらに私事に亘るが、私個人が、地味なクラシック番組を長年にわたってプロデュースし、ラジオにおける生演奏のクラシック音楽番組の維持と発展に大きな功績を収めたとの理由で、放送人にとってもっとも名誉とされる「第6回（昭和43年）放送批評家賞（ギャラクシー賞）」という過分な賞を受けた。この受賞を祝って、朝比奈隆先生をはじめ小沢征爾氏ほかの方々によって「裕川雅雄を励ま す会」を盛大に催していただき、プロデューサー冥利につきると、いまだに忘れられない。

番組存続の重大危機

このようにかずかずの栄誉を手にした『新日鉄コンサート』にも二度ほど、もはやこれまでかといった重大な危機があった。一度目は昭和37年から38年にかけて、不景気のため鉄鋼が減産を余儀なくされた時だった。富士製鐵サイドは、番組は一応初期の成果を挙げた事だし、この辺で打ち切るかレコード番組に切り替えるかといった緊迫した空気だったが、齋藤秀雄先生をはじめ皆さんが、「クラシックの火を消すな、出演料など要らない」と立ち上がって下さったお陰で、無事切り抜けられた。

番組存続の最大の危機は、昭和45年の富士製鐵と八幡製鐵の大合併を前にしてであった。富士の広報部長は「もし合併後自分が再び番組担当を命ぜられたらクラシック番組はやらないよ」と公言して憚らない。ニッポン放送でも大勢は番組が終了に傾いていて諦めムードが満ちあふれていた。編成局長から「番組はなくなるのだから、お前はもうスポンサーのところへは行くな」と言い渡される始末で最悪の段階にあった。

しかし、私はとても諦めきれず、音楽界の第一線で活躍中の諸先生方の連名で陳情書を提出したり、安川大五郎氏から直接永野重雄社長に番組継続のお願いをして頂いたりしながら、当時秘書室長の三鬼彰氏にお会いした。すると同氏は言下に「自分はクラシックはよく分からんが、方々でお宅は良い番組をやっていますねと言われるんだ。そんな良い番組なのに、鹿内さんは続けてほしいとは一度も言って来ないよ、それにこちらとしてはフジテレビが推す美術番組をやるつもりはないからね」と言われる。よろこび勇んで編成局長に報告。一件落着となり、社内の暗い空気が雲散霧消、私も勇気百倍、従前に倍して番組作りに精を出すようになった。

NFC交響楽団の「第九」公開録音

番組発足当時、石田編成局長から「音楽聴き歩きは、まあ言うならば夜回りみたいなものだ。できる限り続けろよ」と励まされ、毎晩のようにコンサート会場めぐりをしたものだ。今振り返ると、私は私なりにクラシック音楽界とともに歩き、その歴史を番組の中に綴ってきたつもりである。

番組はその後平成17年3月まで続き、50周年を迎えて終了しました。

（編集委員会）